

# 婉曲用法としてのカモシレナイと視点

国沢 里美\*

---

## 目 次

---

1. はじめに
  2. 婉曲用法のカモシレナイと視座
    2. 1 視座とは
    2. 2 カモシレナイの視座
  3. カモシレナイの使い方に見られた世代差
    3. 1 カモシレナイが使われる場合
    3. 2 カモシレナイが使いにくい場合
    3. 3 カモシレナイの許容度にゆれがある場合
  4. まとめ
- 
- 

## 1. はじめに

文は大きく分けて、客観的な事柄内容である「命題」と話し手の心的態度である「モダリティ」からできているという考え方は多くの先行研究によって説明されてきた。そして、カモシレナイは話し手の認識に関わる「認識のモダリティ」形式として(1)、(2)のように命題内容が不確実な場合を中心に考察されてきた。しかし、カモシレナイは(3) (4)のように命題内容が真であると認識されている場合にも使える。

- (1) 私は今日死ぬかもしれないし、明日死ぬかもしれない。だけど、やっぱり死ねないよ。  
(m-gata-isyo.jugem.jp/?eid=2)
- (2) 業種や職種によってその内容は変化します。依頼をするのは上司かもしれないし、顧客かもしれないし、部下かもしれない。(www.hyuki.com/writing/sigoto2.html)

---

\* 建陽大学 日本言語文化学科

- (3) A : 別に、僕はどこでどんな死に方をしてもいいですけどね  
 B : 君はそれでいいかもしれないが、俺は嫌だね。一人の囲碁愛好家として、君の天才が認められるのを見なかったら、死んでも死にきれない  
 (miraculum.satin.jp/cont/ff/rengoku03.html)
- (4) A : 大切な人のお父さまは退院したよ。よくはなっていないけど、悪くもならなくてお薬で治療していくことになったの。ほんの少しだけほっとしたかな。まだまだこれからだけだね。  
 B : まだこれからかもしれないけど、とりあえず良かったですね。  
 (cgi.www5d.biglobe.ne.jp/~snow1/kerobbs/kerobbs.cgi?page=20)

本稿では、(3)、(4)のような命題内容が真であると認識されている場合に用いられる、いわゆる婉曲用法のカモシレナイを考察の対象とする。

カモシレナイの意味を考察し、それを「認識のモダリティ」形式の中で体系的に記述した先行研究として、三宅 (1992) が挙げられる。三宅は、カモシレナイを「命題の真偽に関する話し手の認識を表す意味成分」である「認識のモダリティ」の中に位置付け、カモシレナイは命題内容が真である<可能性>を認識している形式であると述べた。そして、同じ「認識のモダリティ」であるヨウダは命題内容が真である<証拠>を認識している形式であると述べている。しかし、それだけでは話し手がどの視座から命題内容を認識しているかが明らかでないため、次のヨウダとカモシレナイの使い方の違いを説明することは難しい。

[場面]話し手が自分自身で、車が近づいていることを確認して

- (5) 車が来たようだ。  
 (6) \*車が来たかもしれない。  
 (7) 車が来たようだが、授業は続ける。  
 (8) 車が来たかもしれないが、授業は続ける。

ヨウダは(5)でも(7)でも使える。しかし、カモシレナイを使った(6)は非文となるが、(8)は自然な文だと言える。

本稿では、話し手がどこから対象をながめ、命題内容を認識しているかという「視座」の観点から婉曲用法のカモシレナイを考察する。

## 2. 婉曲用法のカモシレナイと視座

### 2.1 視座とは

本稿における「視座」を定義するために、「視点」に関する先行研究を概観する。

まず「視点」という概念を積極的に導入したものとして、大江 (1975) や久野 (1978) が挙げられる。大江は、「授受動詞が描写する授受のできごとを、その当事者として内部

から主観的に眺めるひとの位置」である「視線の軸」を設定した。久野は、視点を「カメラ・アングル」にたとえ、話し手が何処にカメラを置いて出来事を描写しているかによって、論理的意味内容が同じ文が異なる表現を持つことを述べている。両者は、視点を「どこから見ているか」という意味で捉えており、これは本稿での「視座」に当たる。また、久野は、「カメラ・アングル」の移動を認め、対象人物に最も近づけた状態を「同化」「自己同一化」(Identification)と呼び、「共感(Empathy)度」という概念を導入した。

次に、対象をながめる位置である「視座」と、見られる対象である「注視点」とを区別したものとして、佐伯(1978)や宮崎・上野(1985)がある。佐伯は、「対象を見る眼の位置」を「視座」とし「その視座からながめたときに注目される対象の側面や属性」を「注視点」としている。宮崎・上野も佐伯と同様に「視点」には「どこから見ているか」といときの“どこ”をさす場合」と「どこを見ているか」といときの“どこ”をさす場合」という2つの意味があるとしている。また、佐伯は視点の設定について、自分の分身である「小びと」を生み出し、他人の中、自分の中、モノや図形の中など様々な場所に派遣することによると述べている。さらに、モノゴトを「理解した」と実感できるのは、その小びとが自由に活動するためであるとしている。

さらに、「視点」に4つの要素を認めたものとして、茂呂(1985)や松木(1992)がある。茂呂は、①視点人物(だれが見るのか)、②視座(どこから見ているか)、③注視点(どこを見ているか)、④見え(見たこと)の4つを述べている。松木も術語は異なるが、同様の要素を指摘している。また、茂呂は、視座を移動させて対象を表現する例を認めている。

本稿も、「視点」には「視点人物」「視座」「注視点」「見え」の4つの要素があると考え、これらを区別する。

モダリティは「話し手の発話時の心的態度」を表すが「視点人物」である話し手が常に話し手自身の「視座」から命題内容を認識しているわけではない。(9a)において、Bの発話における「視点人物」は「俺は嫌だ」という認識を表している話し手Bである。しかし、従属節の「それでいい」という命題内容は、聞き手であるAの「視座」から認識されている。これは(9a)が(9b)のように言い換えることができることから言える。<sup>1)</sup>

- (9)a. A : 別に、僕はどこでどんな死に方をしてもいいですけどね  
 B : 君はそれでいいかもしれないが、俺は嫌だね。
- (9)b. A : 別に、僕はどこでどんな死に方をしてもいいですけどね  
 B : 君の立場から(判断)すればそれでいいかもしれないが、俺は嫌だね。

1) 松木(1992:66)は、「からすれば」「からいって」「からみると」といった複合辞について、ある場から事物を眺めて判断・評価を下すという、話し手の視座を明確に示す表現であり、「からすれば」等が受けている名詞句がそれぞれの文における視座であると述べている。

カモシレナイを考察する上で、視点人物と視座とを区別し、その視座を明らかにする。

## 2. 2 カモシレナイの視座

婉曲用法におけるカモシレナイとヨウダは、命題内容を真であると認識しているのが話し手であるという点では共通しているが、話し手がどの視座から命題内容を認識しているかという点で違いがあると言える。

[場面 1]話し手が家の中にいる状態で、外の車のエンジン音を聞いて

(10) 車が来たようだ。

(11) 車が来たかもしれない。

[場面 2]話し手が自分自身の目で、車が近づいていることを確認して

(12) 車が来たようだ。 ((5)を再掲)

(13) \*車が来たかもしれない。 ((6)を再掲)

[場面 1]では、話し手は直接車が近づいてくるのを確認したわけではないため、「車が来た」という命題内容は不確実である。それに対して[場面 2]は、話し手自身の目で車を確認しており、命題内容は真である。(12)のようにヨウダを使うとその命題内容が不確実であるかのような意味を帯びる。話し手はヨウダを使い、事実をそのまま述べることを避け、話し手が話し手自身の視座から観察した命題内容であることを述べることで他者への配慮を表していると言える。(12)は言えるが(13)は言えないことから、カモシレナイはヨウダのように、命題内容が真である場合、話し手自身の視座からの認識であることを表す用法としては用いられないことが分かる。しかし、(14a)は自然な文である。

(14)a. [場面] 授業中、救急車が校内に入ってきたことにより、学生が騒いだ

学生：あー、救急車だ。

教師：静かに。救急車が来たかもしれないが、授業は続ける。

この文の視点人物は「授業は続ける」という認識を表している教師である。従属節である「救急車が来た」という命題内容の視座は、教師である可能性と学生である可能性が考えられるが、(14a)は(14b)のように解釈することが自然であるように思われる。

(14)b. 学生：あー、救急車だ。

教師：静かに。君たちの目には救急車が来た様子が見えたかもしれないが、その見たと授業とは関係がないから、授業は続ける。

すなわち、この場合、教師は救急車を見ていないと解釈するほうが自然である。これは日本語母語話者50名に行なったアンケート調査<sup>2)</sup>の結果とも一致する。アンケートでは、授業中、教師が「救急車が来たかもしれないが、授業は続ける」と発話している3つの場面を提示した。①学生も教師も救急車を見た場合（アンケートの例文16）、②学生は救急車を見たが、教師は見ていない場合（同17）、③学生は救急車を見ておらず、教師だけが見た場合（同18）である。それぞれの場面において、カモシレナイが言えると思う場合には○、言えないと思う場合には×、判断に迷うものには△を書いてもらった。結果は表1に示すとおりである。

表1 誰が命題内容を認識しているか

	①学生も教師も救急車を見た場合			②学生だけが救急車を見た場合			③教師だけが救急車を見た場合		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×
10代	2	0	8	8	0	2	0	0	10
20代	2	1	7	9	0	1	1	0	9
30代	5	1	4	8	1	1	4	0	6
40代	2	1	7	8	0	2	2	0	8
50代以上	5	0	5	9	0	1	2	0	8
合計	16 (32%)	3 (6%)	31 (62%)	42 (84%)	1 (2%)	7 (14%)	9 (18%)	0 (0%)	41 (82%)

②は言いやすく、③は言いにくい傾向にあることが分かる。すなわち、カモシレナイは、学生だけが救急車に気付いている場面では使われやすく、教師だけが救急車に気付いている場面では使いにくい。婉曲用法のカモシレナイは、話し手以外の人物が命題内容を認識している場合に使われると言える。

さらに、①と②を比較すると、②のほうが言いやすいことが分かる。学生が救急車に気付いているという同じ条件において、教師も救急車に気付いている場合より、気付いていない場合のほうがカモシレナイを使いやすい。②が言いやすいのは、教師が学生の視座から命題内容を認識しているからであると解釈できる。話し手は視座を「聞き手及び第三者」に移動させることで、直接観察（体験）していない事態に対しても命題内容が真であると述べるができる。反対に、①が②に比べて言いにくいと判断されるのは、話し手と「聞き手及び第三者」の認識が一致するからであると考えられる。認識が一致している場合は

2) 日本語母語話者がカモシレナイをどのように意識しているかを知るため、アンケート調査を行った。アンケート協力者は高知県在住(2005年12月)の50名である。10～40代までの各世代10名ずつと、50代以上10名(50代が7名、60代が3名)である。世代による許容度の違いに注目するため、協力者を一部地域在住者に統一した。(資料1)

視座を移動させる必要がないため、カモシレナイが使いにくくなると言える。

婉曲用法としてのカモシレナイについて次のように言える。

：命題内容が真であると認識されている場合に、それが話し手以外の人物の視座から認識した命題内容であることを表す形式

### 3. カモシレナイの使い方に見られた世代差

日本語母語話者がカモシレナイをどのように意識しているかを知るため行ったアンケート調査の結果には、カモシレナイの使い方に見られた。

#### 3.1 カモシレナイが使われる場合

話し手にとっても話し手以外の人物にとっても命題内容が不確実な場合にはカモシレナイを使うことができる。この場合、推量用法である。アンケート調査の結果、50人全員が(15)が言えると判断した。

(15) [場面] AとBは家の中にいます。Aは車のエンジン音を聞きました。

A：< Bへの言葉 > お父さんが帰ってきたかも （かもしれない）。

(=アンケートの例文1)

また、話し手にとっては命題内容が不確実であっても「聞き手及び第三者」にとっては真であ（り得）る場合、カモシレナイは使われる。50人中49人が(16)が言えると判断した。

(16) [場面] Bは事件のことについて“いい”とは思っていません。

A：あの事件のことは、もういいよ。

B：おまえはそれでいいかもしれないけど、私は納得できない。 (＝同20)

(15)、(16)は世代差に関係なく、一般的に使われている用法であると言える。

#### 3.2 カモシレナイが使いにくい場合

話し手にとっても「聞き手及び第三者」にとっても命題内容が真であると思われており、認識が一致すると考えられる場合には、カモシレナイは使いにくい。50人中45人が(17)が言えないと判断した。

(17) [場面] AもBも家の外にいます。2人は自分たちのほうに向かって救急車が近づいている様子を直接見えています。

A : < Bへの言葉 > 救急車が来たかも (かもしれない)。(=同2)

次の例からも、話し手以外の人物にとって命題内容が真である場合、話し手が「聞き手及び第三者」と同じ情報を持っている場合のほうが、カモシレナイが使いにくいことが分かる。(18)が言えないと判断した人は5人いるが、このうちの4人は(19)も言えないと判断している。(19)は言えるが(18)は言えないと判断したのは1人しかいなかった。

(18) [場面] BはCが「大丈夫だ」と言ったことを知りません。

A : Cさんは大丈夫だって言ったよ。

B : あの人はそう言ったかもしれないけど、ダメだよ。(=同8)

(19) [場面] BはCが「大丈夫だ」と言ったことを知っています。

A : Cさんは大丈夫だって言ったよ。

B : あの人はそう言ったかもしれないけど、ダメだよ。(=同9)

表2話し手が「聞き手及び第三者」と同じ情報を  
持っている場合と持っていない場合

	(18)情報を持っていない場合			(19)情報を持っている場合		
	○	△	×	○	△	×
10代	7	1	2	4	0	6
20代	10	0	0	3	2	5
30代	8	2	0	1	3	6
40代	6	2	2	0	2	8
50代以上	6	3	1	5	2	3
合計	37(74%)	8(16%)	5(10%)	13(26%)	9(18%)	28(56%)

このことから「聞き手及び第三者」にとって命題内容が真である場合、話し手にとって命題内容が不確実なときにはカモシレナイが使いやすく、話し手にとって命題内容が真であるときには許容度が下がることが分かる。

### 3. 3 カモシレナイの許容度にゆれがある場合

話し手にとっては命題内容が真であるが、「聞き手及び第三者」にとっては不確実である場合は、カモシレナイが言えるかどうかの判断に世代差が見られた。すなわち、(20)～(22)の場合は、若い世代ほど言いやすくなるという傾向が見られた。

(20) [場面] Bは全部見られなかったことを“残念だった”と思っています。

A：昨日、C校の学園祭に行ったんだって。どうだった？

B：楽しかったよ。でも、時間がなくて全部見られなかったのは残念だったかも（かもしれない）。」（＝同4）

(21) [場面] AとBはレストランで同じ料理を食べています。Aは料理が“おいしい”と思いました。

A：< Bへの言葉 >これ、おいしいかも（かもしれない）。 （＝同6）

(22) [場面] Aは“おなかすいた”と思っています。

A：おなかすいたかも（かもしれない）。

B：じゃあ、何か食べに行く？（＝同14）

表3 話し手が自分の感情・感覚を述べる場合

	10代			20代			30代			40代			50代以上		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×
(20)	3	1	6	0	0	10	0	2	8	0	0	10	0	0	10
(21)	4	0	6	2	1	7	2	0	8	1	1	8	0	0	10
(22)	6	0	4	2	2	6	2	1	7	2	0	8	1	0	9

「残念だった」「おなかすいた」「おいしい」という命題内容は話し手の感情・感覚を表すものであり、命題内容を直接認識できるのは話し手だけである。しかし、話し手が視座を移動させて第三者の立場から自分の感情・感覚を認識した場合、カモシレナイが使えるようになる。若い世代ほど、自分自身の認識を直接表現することを避け、第三者の視座から認識した内容として表現する傾向にあると言える。

(23)が言えると判断する人は若い世代ほど多くなる傾向にあるが、若い世代の人であっても(24)は言いにくいと判断している。

(23) [場面] AとBはレストランで同じ料理を食べています。Aは料理が“おいしい”と思いました。

A：< Bへの言葉 >これ、おいしいかも（かもしれない）。 （＝同6、(21)を再掲）

(24) [場面] AとBはレストランで同じ料理を食べています。Aは料理が“おいしい”と思いました。

B：これ、おいしいね。

A：うん、おいしいかも（かもしれない）。 （＝同7）

表4 聞き手の認識が表れている場合と表れていない場合

	(23)表れていない場合			(24)表れている場合		
	○	△	×	○	△	×
10代	4	0	6	2	0	8
20代	2	1	7	0	3	7

30代	2	0	8	1	1	8
40代	1	1	8	0	0	10
50代以上	0	0	10	0	0	10
合計	9(18%)	2(4%)	39(78%)	3(6%)	4(8%)	43(86%)

(23)も(24)も話し手の認識を表している文であるが、(23)では聞き手の認識が不明なのに対し、(24)では話し手が発話する前に聞き手の認識が表現されている。話し手と聞き手の認識が一致している場合、話し手は視座を聞き手側に移動させることが難しくなると言える。

同様の理由で(25)、(26)は若い世代であっても言いにくい。(26)におけるAの認識は明示されていないが、合格を肯定的に評価することは常識的に考えられ、BはAの認識を予測できると考えられる。

(25) [場面] AはBの怪我を心配しています。Bは“痛い”と思っています。

A:怪我、大丈夫？痛い？

B:うん、痛いかも (かもしれない)。(=同12)

(26) [場面] BはD高校に合格したことを“嬉しい”と思っています。

A:D高校に合格したんだって？

B:うん、そうなんだ。嬉しいかも (かもしれない)。(=同19)

表5 聞き手の認識が表れている場合

	(25)			(26)		
	○	△	×	○	△	×
10代	1	0	9	1	0	9
20代	1	0	9	0	0	10
30代	2	0	8	2	0	8
40代	0	0	10	0	0	10
50代以上	0	0	10	0	0	10
合計	4(8%)	0(0%)	46(92%)	3(6%)	0(0%)	47(94%)

次の結果から、若い世代ほど視座の移動を意識していることが分かる。

(27) [場面] Bは自分がAに対して「怒らない」と言ったことを覚えています。

A:怒らないって言ったじゃない。

B:そう言ったかもしれないけど、今はそんなことは関係ない。(=同13)

表6 話し手の過去の発言について述べる場合

	(27)		
	○	△	×
10代	4	1	5
20代	8	0	2
30代	8	0	2
40代	6	2	2
50代以上	10	0	0
合計	36(72%)	3(6%)	11(22%)

(27)について、50代は全員が言えると判断したが、10代では判断が分かれている。若い世代ほど、カモシレナイは「聞き手及び第三者」の視座から述べる用法であるという意識を多く持っていると考えればこの傾向が説明しやすくなる。この場面において、話し手以外の人物の視座から認識した命題内容であることを表すカモシレナイを使うと、話し手が過去の自分の発言に責任を持っていないような印象を与える可能性があるため、言えないと判断したと考えられる。

アンケート調査の結果から、若い世代ほど「聞き手及び第三者」にとって命題内容が不確実である場合にもカモシレナイが使える傾向が見られる。視座を移動させることによって話し手の認識がまるで「聞き手及び第三者」の認識であるかのように表す傾向にあると言える。

## 4. まとめ

婉曲用法としてのカモシレナイを考察した結果、次のことが分かった。

- 1) カモシレナイは「聞き手及び第三者」の視座から命題内容を認識している。
- 2) カモシレナイが使われる条件には許容度の高い場合と低い場合がある。
  - a. 話し手にとっては不確実な命題内容であっても「聞き手及び第三者」にとっては真である場合、カモシレナイは使いやすい。
  - b. 話し手にとっても「聞き手及び第三者」にとっても命題内容が真であると思われる場合、カモシレナイは使いにくい。話し手と「聞き手及び第三者」の認識が一致していると考えられる場合ほど許容度が下がる。
  - c. 話し手にとっては真である命題内容が「聞き手及び第三者」にとっては不確実である（可能性が高い）場合は、許容度にゆれがある。話し手が自分の感情・感覚を述べる「おなかすいたかも」などのような表現の許容度は、若い世代において高い。

若い世代には、実際には話し手の認識である場合も視座を移動させ、それが話し手以外の人物の認識であるかのように述べる傾向が見られた。

## 【参考文献】

- 大江三郎 (1975) 『日英語の比較研究－主観性をめぐって』 南雲堂  
久野 瞳 (1978) 『談話の文法』 大修館書店  
佐伯 胖 (1978) 『イメージ化による知識と学習』 東洋館出版社  
寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅱ巻』 くろしお出版  
仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房  
益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』 くろしお出版  
松本正恵 (1992) 「『見ること』と文法研究」 『日本語学』 第11巻第9号、明治書院、pp.57-71  
三宅知宏 (1992) 「認識的モダリティにおける可能性判断について」 『待兼山論叢 本学編』 第26号、大阪大学文学部、pp.35-47  
宮崎清孝・上野直樹 (1985) 『視点』 東京大学出版  
茂呂雄二 (1985) 「児童の作文と視点」 『日本語学』 第4巻第12号、明治書院、pp.51-60

## 【資料1】

日本語母語話者がカモシレナイをどのように意識しているかを知るため、アンケート調査を行った。アンケート協力者は高知県在住（2005年12月現在）の50名である。アンケートの例文は全て筆者の作例である。

＜アンケート調査の協力者＞

- 10代・・・10名(男2/女8)、高知県出身9名/岡山県出身1名、高校生限定  
20代・・・10名(男2/女8)、高知県出身9名/福岡県出身1名、社会人限定  
30代・・・10名(男2/女8)、高知県出身9名/徳島県出身1名  
40代・・・10名(男2/女8)、高知県出身8名/愛媛県出身2名  
50代以上(50代7名、60代3名)・・・10名(男2/女8)、高知県出身9名/京都府出身1名

＜アンケート調査の内容＞

それぞれの場面で、下線部の表現が言えるかどうかを直感で判断してください。

- ・言えると思うものには、○を書いてください。
- ・言えないと思うものには、×を書いてください。

・判断に迷うものには、△を書いてください。

「かも」、「かもしれない」、「かしれません」は同じものとして判断してください。

\* 以下の会話に出てくるAとBの関係は友達です。

(1)場面：AとBは家の中にいます。Aは車のエンジン音を聞きました。

A 「<Bへの言葉>お父さんが帰ってきたかも (かもしれない)。」 ( )

(2)場面：AもBも家の外にいます。2人は自分たちの方に向かって救急車が近づいている様子を直接見えています。

A 「<Bへの言葉>救急車が来たかも (かもしれない)。」 ( )

(3)場面：AとBが明日のパーティーについて話しています。2人とも、Cが参加するかどうか知りません。

A 「Cさん、明日のパーティーに来るかな？」

B 「来ないかも (かもしれない)。」 ( )

(4)場面：Bは全部見られなかったことを“残念だった”と思っています。

A 「昨日、C校の学園祭に行ったんだって。どうだった？」

B 「楽しかったよ。でも、時間がなくて全部見られなかったのは残念だったかも (かもしれない)。」 ( )

(5)場面：AとBはレストランに来ました。今、メニューを見ています。2人とも初めて来た店なので、味は分かりません。

A 「これ、おいしいかな。」

B 「おいしいかも (かもしれない)。」 ( )

(6)場面：AとBはレストランで同じ料理を食べています。Aは料理が“おいしい”と思いました。

A 「<Bへの言葉>これ、おいしいかも (かもしれない)。」 ( )

(7)場面：AとBはレストランで同じ料理を食べています。Aは料理が“おいしい”と思いました。

B 「これ、おいしいね。」

A 「うん、おいしいかも (かもしれない)。」 ( )

(8)場面：BはCが「大丈夫だ」と言ったことを知りません。

A 「Cさんは大丈夫だって言ったよ。」

B 「あの人はそう言ったかもしれないけど、ダメだよ。」 ( )

(9)場面：BはCが「大丈夫だ」と言ったことを知っています。

A 「Cさんは大丈夫だって言ったよ。」

B 「あの人はそう言ったかもしれないけど、ダメだよ。」 ( )

(10)場面：AとBは一緒に洋服店に来ました。Aは今、試着をしています。Aは洋服を着てみて、“サイ

ズが大きい”と思いました。Bは試着室の外にいますので、Aの姿は見えません。

A 「< Bへの言葉>大きいかも (かもしれない)。」 ( )

(11)場面：AとBは一緒に洋服店に来ました。Aは今、試着をしています。Aは洋服を着てみて、“サイズが大きい”と思いました。Aは試着室の外に出て、Bに試着した姿を見せました。

A 「< Bへの言葉>大きいかも (かもしれない)。」 ( )

(12)場面：AはBの怪我を心配しています。Bは“痛い”と思っています。

A 「怪我、大丈夫？ 痛い？」

B 「うん、痛いかも (かもしれない)。」 ( )

(13)場面：Bは自分がAに対して「怒らない」と言ったことを覚えています。

A 「怒らないって言ったじゃない。」

B 「そう言ったかもしれないけど、今はそんなことは関係ない。」 ( )

(14)場面：Aは“おなかかすいた”と思っています。

A 「おなかすいたかも (かもしれない)。」 ( )

B 「じゃあ、何か食べに行く？」

(15)場面：AがBを心配しています。Bは“疲れた”と思っています。

A 「どうしたの？ 元気ないよ。」

B 「うん、疲れたかも (かもしれない)。」 ( )

(16)場面：ここは学校で、今は授業中です。学生も教師も救急車が校内に入ってきたのを見えています。

学生 「救急車が来た！」

教師 「救急車が来たかもしれないが、授業は続ける。」 ( )

(17)場面：ここは学校で、今は授業中です。学生は救急車が校内に入ってきたのを見えています、教師は見えていません。

学生 「救急車が来た！」

教師 「救急車が来たかもしれないが、授業は続ける。」 ( )

(18)場面：ここは学校で、今は授業中です。教師は救急車が校内に入ってきたのを見えています、学生は救急車が来たことを知りません。

教師 「< 学生への言葉>救急車が来たかもしれないが、授業は続ける。」 ( )

(19)場面：BはD高校に合格したことを“嬉しい”と思っています。

A 「D高校に合格したんだって？」

B 「うん、そうなんだ。嬉しいかも (かもしれない)。」 ( )

(20)場面：Bは事件のことについて“いい”とは思っていません。

A 「あの事件のことは、もういいよ。」

B 「おまえはそれでいいかもしれないけど、私は納得できない。」 ( )

<アンケート調査の結果>

表7 カモシレナイが使いやすいと判断されたもの

	10代			20代			30代			40代			50代以上		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×
(1)	10	0	0	10	0	0	10	0	0	10	0	0	10	0	0
(20)	10	0	0	10	0	0	9	0	1	10	0	0	10	0	0
(17)	8	0	2	9	0	1	8	1	1	8	0	2	9	0	1
(8)	7	1	2	10	0	0	8	2	0	6	2	2	6	3	1
(3)	8	1	1	7	1	2	8	1	1	6	2	2	7	1	2
(10)	8	1	1	8	1	1	7	0	3	4	2	4	7	0	3

表8 カモシレナイが使いにくいと判断されたもの

	10代			20代			30代			40代			50代以上		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×
(19)	1	0	9	0	0	10	2	0	8	0	0	10	0	0	10
(12)	1	0	9	1	0	9	2	0	8	0	0	10	0	0	10
(2)	0	0	10	1	1	8	2	0	8	0	0	10	1	0	9
(7)	2	0	8	0	3	7	1	1	8	0	0	10	0	0	10
(18)	0	0	10	1	0	9	4	0	6	2	0	8	2	0	8

表9 カモシレナイの許容度に世代差が見られたもの

	10代			20代			30代			40代			50代以上		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×
(4)	3	1	6	0	0	10	0	2	8	0	0	10	0	0	10
(6)	4	0	6	2	1	7	2	0	8	1	1	8	0	0	10
(14)	6	0	4	2	2	6	2	1	7	2	0	8	1	0	9
(13)	4	1	5	8	0	2	8	0	2	6	2	2	10	0	0

表10 世代差に関係なく許容度にゆれが見られたもの

	10代			20代			30代			40代			50代以上		
	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×	○	△	×
(5)	3	2	5	4	3	3	6	0	4	3	1	6	5	0	5
(9)	4	0	6	3	2	5	1	3	6	0	2	8	5	2	3
(11)	7	1	2	6	1	3	3	1	6	2	1	7	6	0	4
(15)	4	0	6	5	1	4	4	1	5	5	0	5	5	1	4
(16)	2	0	8	2	1	7	5	1	4	2	1	7	5	0	5

## 要 旨

本稿は、「視座」の観点から、現代日本語の「認識のモダリティ」形式であるカモシレナイの婉曲用法について考察したものである。話し手が命題内容を真であると認識しているにも関わらず、命題内容が不確実なものであるかのように述べる婉曲用法の場合、カモシレナイは「聞き手及び第三者」の視座から命題内容を認識している。例えば、話し手が車が近づいてくる様子を直接確認している場面において、「車が来たかもしれない」と言えばそれは不自然に聞こえるが、「車が来たかもしれないが、授業は続ける」には不自然さが感じられない。ただし、車が来たことを話し手以外の人物が認識していない場合には使いにくい。この場合、話し手は視座を「聞き手及び第三者」に移動させて命題内容を認識している。

カモシレナイが使いやすい条件と使いにくい条件について次のことが分かった。カモシレナイは、(a)話し手にとっても「聞き手及び第三者」にとっても命題内容が不確実な場合、及び(b)話し手にとっては不確実な命題内容であっても「聞き手及び第三者」にとっては真である場合には使いやすい。命題内容が(c)話し手にとっても「聞き手及び第三者」にとっても真であると思われる場合には使いにくい。さらに、(d)話し手と「聞き手及び第三者」の認識が一致していると考えられる場合ほど許容度が下がることが分かった。しかし、(e)話し手にとって真であると認識された命題内容が「聞き手及び第三者」にとっては不確実である（可能性が高い）場合は許容度にゆれがある。話し手が自分の感情・感覚を述べる「おなかすいたかも」「(料理を食べて)おいしいかも」などのような表現の許容度は、若い世代において高い。若い世代には、実際には話し手の認識である場合でも視座を移動させ、それが話し手以外の人物の認識であるかのように述べる傾向にある。

キーワード :カモシレナイ、婉曲用法、モダリティ、視点、視座、アンケート、世代差

투 고 : 2008. 2. 29

1차 심사 : 2008. 3. 15

2차 심사 : 2008. 3. 29

住 所 : (320-711) 충남 논산시 대학로 119 건양대학교 일본언어문화학과  
電 話 : 010-9257-1631  
e-mail : k\_satomi30@hotmail.com